

# 『千年前の人類を襲った大温暖化 文明を崩壊させた気候大変動』

ブライアン・フエイガン著 東郷えりか(翻訳)

食料領域 研究員 田中淳志

地球規模での温暖化が叫ばれている現在、10年後、30年後、50年後のわれわれの将来はどうなってしまうのだろうか。エルニーニョやラニーニャの猛威はどこまで強大になるのだろうか？気温はどの変動するのだろうか？生物多様性の減少は？食糧生産の確保は？水資源の枯渇は？砂漠化の拡大は？海面水位の上昇は？そしてクリーンエネルギーを用いた低炭素社会への脱皮を果たし、生活レベルを維持しながら「文明」は存続しているのだろうか？

読者は6世紀から16世紀にかけての世界をあちこち旅をしながら、文明の盛衰の歴史を、著者であるブライアン・フエイガンとともに、気候変動の視点から捉える。

Change and The Rise and Fall of Civilizations-」となっているように、本書では、過去の気候変動がある文明を台頭させ、ある文明を崩壊させた史実が描かれている。著者によれば、中世温暖期(およそ800〜1300年)と呼ばれた時期、ヨーロッパは気候に恵まれ、食糧生産にゆとりができた結果、ゴシック建築が生まれた。北欧諸国の民はクナルル船で、北大西洋に乗り出し、アイスランドのフェロー諸島やグリーンランド南部に到達し、カナダのイヌイットなどと交流を行っていた。一方で、南北アメリカ大陸は干ばつに襲われ、カリフォルニアなどの一部の地域を除き、人影が消えた。寒冷であった中国北部は中世温暖期の恩恵により気温が高くなるが、雨が十分に降らずに農業生産性が低く、しばしば干ばつに見舞われ、人々は苦しんだ。

コーラシアー帯での温暖な数世紀は、深刻な干ばつと時に訪れる寒い冬により、人々に恩恵を与えていたとは限らなかった。アフリカでも激しい干ばつが続き、多くの命が失われ、拡大する砂漠を避け、移動する湖を求めながらラクダの隊商が危険な交易を行っていた。中央アメリカでは、干ばつによりマヤ文明の都市が根底から揺らぎ、アンドンズではチチカカ湖が干上がり、川が枯れることにより文明が衰退していった。

気候学の発達により、海洋コア、極地での氷探掘、サンゴ化石、樹木年輪といった試料を利用して、大昔までの気候変動を推論する科学技術が発達した。またエルニーニョやラニーニャなどの気象変動の研究も加わり、多くの科学研究が、過去に地球が経験した気候変動を明らかにしてきた。これらの成果の要点を拾い上げ、落ち着きなくあちこちに話題を飛ばしながら、著者は中世温暖期の世界について述べる。そして、中世温暖期とは、本質的に見れば、中世干ばつ期と言い代えることが相応しく、温暖化によるもったもなき脅威は干ばつであると述べている。



英題が「The Great Warming - Climate

本書を読むにあたり事前にいくつかの書評を読むと、「地球温暖化に直面する現代人が今知るべき、気候大変動のメカニズムと人類がとった生き残り戦略」が描かれているなどと書かれていることが多かった。当時の人々の気候変動に対する生き残り戦略とは、収穫の多い年に取れたドングリを貯蔵したり、灌漑水路を整備したりということであり、それでも手に負えない場合にはその土地を放棄するしかなかった。

残念ながら、自然の前には水を求めて民族の離散・移動以外に、特筆すべき戦略はなかった。ただかか程度の気温上昇により、恩恵を受けたヨーロッパの人々がいる一方で、何百万の人々が干ばつで苦しみ、命を落としてきた歴史が書かれている。

地球の人口が今よりもずっと小さく、都市の人口でさえ数万人程度の時代には、干ばつ時には乾燥した地域から水の豊富な場所に移動したり、貯水池や灌漑用水の構築により、気候変動を人々は生き残ったという。しかし、1000年前の乾燥した時代と比べ、より気温が高く、より干ばつが厳しくなると予想される現在ではどうか。人口が爆発的に増え、地下水位の低下に苦しむ農産物輸出国は、干ばつに耐えて世界に食料を供給できるのか。そしてその時が来たら、再び文明のRise and Fallが起こるのであるだろうか。